

学童の低体位施策に関する地区診断的研究

福井 一明・喜多村 望

A Community Diagnosis on the Physical Development of
School Children in Sanin District.

Kazuaki FUKUI Nozomu KITAMURA

I 課題の提起

わが国青少年の身体的発達の加速化および成熟への前傾々向は、昭和30年前後を境にして次第に著るしい進展をみせてきた。戦中ならびに終戦直後の学童の身体的発達は、劣悪な生活条件のもとに極度の制約を蒙り、著るしい低下をまねいた。しかしながら、その後の急速な生産体制の回復進歩と経済力の高度の伸長にともない、国民生活の諸条件の改善と平行して、学童の身体的発達は再び向上の一途を辿るようになった。（昭和27～28年）このように、巨視的立場から、歴史的に、社会・経済的変動変化と学童を含めた青少年体位の変容過程を観察するとき、両者の間に密接な関係が存在することが分かる。これのみか、明治以降、大正、昭和の年代を追ってみるとき、学童の体位が、基本的には向上を指向しながらも、時代の変動を敏感に反映している事実はこのことを確証づけている。しかし一方、学童の身体的条件として強く関係するこれらの要素が、日常の具体的生活の局面においてどのような態を以って作用するのであるかを明かにすることが、微視的立場から要求される。すなわち、社会、経済的条件の改善が、どのような中間媒体としての作用要因と係わりをもつかということである。

この意味において、国民の生活様式及びその内容、生活意識、行動の規準、行動の実態などの向上が極めて主要な意義をもつことになり、住民生活の微視的観点から、これらの内面的・外面的基本条件を検討することが必要となる。

わが国青少年の身体的発達の顕著なことは既述のとおりであるが、一面、地域によってかなりの差異の存在することも事実である。この点について、横断的検討を加えることが、本課題へのアプローチのひとつの角度である。

近時、学校および社会教育の領域、地区における保健福祉活動の課題として、いわゆる「からだづくり」、「体力づくり」、「体位向上」の名のもとに、さまざまな活動が計画され、試みられている。もとよりこの種の活動は、人びとが能率的で健康な生活を確保するために、「からだ」の質的、量的な改善、維持を目指すものであり、学童を含む青少年の身体的資質を最大限にまで発揮させようとする努力のあらわれである。身体的発達に係わる課題は、その設定の立

場や基盤において多様な意味・特質をもつことになる。

われわれは今般、学童のいわゆる低体位問題を解決するために組織された地域のレベルでの「低体位対策」及至「体位向上運動」を媒介して、その活動自体が地区住民の生活構造※にどのように影響するものであるかを事例的に検討することとした。

今回は、その部分的接近の試みとして、地区住民の生活構造を地区診断※※の観点から把握し、問題解決のための地区組織活動計画の推進における基礎的条件をも明かにしようとした。

地区診断※※ 地区の把握と分析の方法には①社会調査 social research, ②社会踏査 social survey, ③地区診断 Community diagnosis の三つの立場があり、それぞれ社会構造、解決すべき問題や病理性の発見、特定問題を中心とする地区の把握とその対策の発見の目的に対応するが、地区診断にもとづく実践過程において、「診断すべき問題を地区全体の立場から見直し、他の領域との関連を十分に知ることが望ましく……まづ地区調査を行い、しかる後に地区診断を実施する」ことが理想型とされる。

II 調査事例の性格

昭和44年以降、島根県松江市大野地区並びに生馬地区（図1）の二地区を中心とする低体位対策推進の活動を機に、実践に役立つ資料を得るために基礎的調査の一部をすすめてきた。

1. 対策活動の発端は、「地区の子どものからだ小さい」という極めて素朴な地区住民の心情的経験に由来し、地区リーダーによって問題の科学的解明と解決への計画が企図された。
2. 公民館活動事業の一環として、主として社会教育の水準で執りあげられた。
3. 公民館を中心として地区の教育機関および組織・団体の役員によって対策協議会が組織され、県ならびに市の保健行政部局の援助をえて、活動の基本構想が検討されてきた。

（各種調査活動も含む）

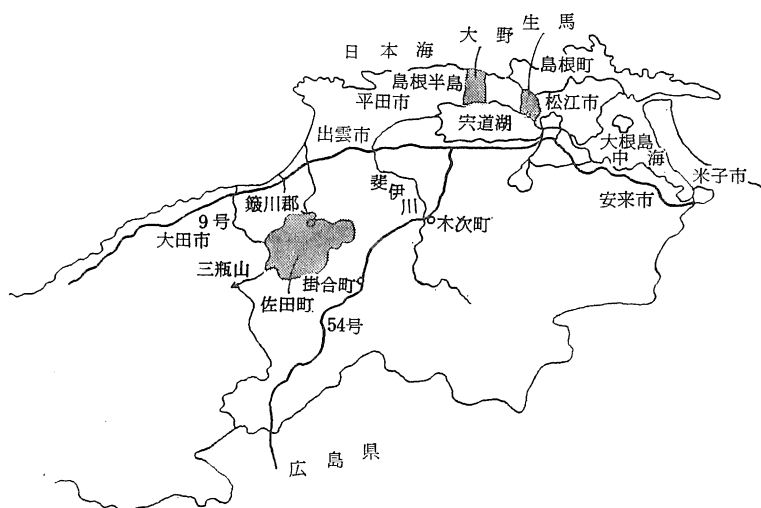
低体位対策協議会（仮称）の運営目標として、当然のことながら当該地区学童の低体位性の原因の究明とそれにもとづく対策の確立と実践が要求された。

もとより学童の身体的発達は、遺伝的資質及び生活様式など後天的生活環境の諸要素が複雑に関連しているために、地区における学童の低体位性を単純な条件の仮説を以って説明することすら容易ではないが、この種の社会的活動をすすめるためには、まづ客観的資料を可能な限り準備することが不可欠の条件と思われる。したがって、まづ活動推進のための基礎的資料を把握するために、地区住民の生活実態を主として保健的側面から検索したのである。

簸川郡佐田町西須佐地区は、調査における比較対照地区としてえられたものである。

※ 生活構造 「一方では生活環境の変化により、他方では生活意識の変化によって作りかえられる」
コミュニティアプローチの理論と技法 48頁 青井・小倉・柏熊・宮坂 續文堂出版KK 昭和38年
※※ 地区診断の理論と実際 106頁—113頁 柏熊岬二・宮坂忠夫他 續文堂出版KK 昭和34年

図 1 調査対象地域



III 調査地区の概況

1. 大野地区は、人口2,214（昭和40年）、松江市の西端に位置し、平田市に隣接する。北は山岳部を介して日本海に面し、南は狭小な河川沿いに開けた水田耕作地が宍道湖岸までひらけている村落部である。昭和35年、松江市に編入された第一次産業中心の産業構造をもち、魚瀬（おのぜ）部落の漁業を除いて他は水稻単作を主体とする農業地帯である。

人口の減少傾向は、へき村部同様、とくに昭和35年以降に著るしい。すなわち、29才以下の若年層の減少と60才以上の老年層の漸増がみられる。地区の主要産業である農業も、その経営規模が小さく、経済的自給力に乏しいために兼業化は勿論、出稼が進行している。したがって農業における専業者の比率が低く、隣接市街地への通勤ならびに賃金就労が高まり、農業労働力は専ら婦人と老人に依存する傾向が強まっている。

2. 生馬地区は、人口2,157（昭和40年）松江市の西郊部に位置して、西は日本海と宍道湖を結ぶ佐陀川、北は島根半島の山岳部に接し、宍道湖に向かって南西に開けた広大な水田地帯を擁する。元来、農業を主産業とするが、近年、松江市街の発展、延長にともない、次第に文教及び住宅地区としての性格をつよめ、恵まれた立地条件によって、外来の「つとめ人」の割合が漸次増加をみるとともに、ここでも専業農家の減少、兼業化の促進というかたちになってあらわれている。すなわち、地区の生産基盤は、依然として米作中心の第一次産業型にありながらも、住民の生活および周辺の状況の変化によって急速な都市化が進行しているとみてよい。

3. 簸川郡佐田町西須佐校区（大字大呂，反辺）佐田町は昭和45年度村制から町制に移した人口7,001（昭和40年）の規模をもち、出雲市、湖陵村、多伎町及び大田市に隣接する中国山地沿いの山村部である。

西須佐校区（大呂，反辺）は人口約2,000，平均標高100mの位置にあって，神戸川の支流，波多川に沿う南北12kmの地域を擁している。山林面積75.6%，米作農家を主とし，林産及び畜産によって生計を維持しているが，近年出稼者の増加と都市部への就職転出が増加した。昭和35年以降の地這りの人口域外流出にともなう若年層の減少と60才以上の相対的増加は人口の老令化とともに地域の生産性の低さを示している。

表 1 人口の推移（人）

	30年	35年	40年
島根県	929,066	888,886	821,620
松江市	103,771	106,476	110,534
大野	2,553	2,456	2,214
生馬	2,138	1,983	2,157
佐田	8,616	8,150	7,001

表 2 調査地区における年令別人口構成比（%）

	0～14才			15～29才			30～59才			60才以上		
	S30	S35	S40	S30	S35	S40	S30	S35	S40	S30	S35	S40
島根県	34.0	31.8	26.6	24.1	21.6	21.3	31.0	34.3	38.1	10.1	12.3	14.1
松江市	30.6	27.1	23.3	28.3	28.0	28.0	31.8	34.7	37.6	9.3	10.2	11.1
大野	35.9	32.8	27.9	23.0	20.4	20.0	30.7	34.0	37.3	10.2	12.8	14.8
生馬	32.2	27.8	21.1	24.9	26.0	32.0	31.6	33.8	33.8	11.3	12.4	13.1
佐田	38.2	37.5	31.8	21.3	16.7	14.7	29.3	33.4	38.2	10.6	12.6	15.0

IV 質問紙法による調査と結果

質問紙は各小学校区の児童の保護者に配布された。配布数および有効回収率は次の通りである。

大野小学校区	242/314	77%
生馬小学校区	239/264	90%
西須佐小学校区	257/300	85%

（以下佐田地区と称する）

対象：学歴及び職業（表3-4）

期日：昭和44年6月～11月（農繁期は避けた）

以下，それぞれの地区における調査結果について，項目，内容別に検討し，比較を試みる。

1. 生活時間構造とその内容（表5-7）

表 3 調査対象の学歴 (%)

	農業男子			非農業男子			農業女子			非農業女子		
	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田
(N)	61	54	71	57	59	56	94	76	93	30	50	37
旧小・新中卒	86.9	64.8	83.1	77.0	44.1	64.3	80.6	60.5	75.3	59.9	52.0	75.7
旧中・旧高女・新高卒	8.2	27.8	11.3	12.3	47.5	19.7	11.7	32.9	18.3	33.3	34.0	10.8
旧高専・大学卒	0	1.7	0	0	3.4	10.7	1.1	0	0	0	8.0	2.7
無記	4.9	5.6	5.6	10.5	5.1	5.4	6.4	6.6	6.5	6.7	6.0	10.8

表 4 調査対象の職業別分類 (%)

	農業男子			非農業男子			農業女子			非農業女子		
	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田
(N)	61	54	71	57	59	56	94	76	93	30	50	37
農業	100	100	100	0			100	100	100	0		
漁業				5.1	0	0				0	0	
建設業				7.7	13.6	8.9				0	2.0	
製造業				6.8	3.4	12.5				3.3	4.0	10.8
卸売・小売業				4.3	5.1	5.4				0	6.0	8.1
公務員				8.5	32.2	19.7				0	10.0	10.8
団体職員				4.3	13.6	14.3				3.3	2.0	10.8
家事・育児				0	0	0				66.7	42.0	24.3
以下略												
無記				2.6	5.1	0				10.0	8.0	0

表 5 労働時間

	農業男子			非農業男子			農業女子			非農業女子		
	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田
(N)	61	54	71	57	59	56	94	76	93	30	50	37
6時間以下	0	3.7	1.4	1.8	3.4	0	1.1	1.3	1.1	6.7	2.0	5.4
6～8時間	31.2	24.1	15.5	19.3	18.7	7.2	25.4	6.6	14.0	16.6	26.0	27.0
8～10時間	44.3	50.0	53.5	45.5	47.5	48.2	21.2	36.8	35.5	46.6	32.0	18.9
10～12時間	11.5	13.0	21.1	21.0	11.9	21.4	22.3	25.0	29.0	13.3	12.0	18.9
12時間以上	8.2	3.7	8.5	5.3	3.4	14.3	24.4	29.0	15.1	6.7	18.0	24.3
無記	4.9	5.7	0	7.0	15.3	8.9	5.3	1.3	5.4	10.0	10.0	5.4

表 6 睡 眠 時 間

	農 業 男 子			非 農 業 男 子			農 業 女 子			非 農 業 女 子		
	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田
(N)	61	54	71	57	59	56	94	76	93	30	50	37
6 時 間 以 下	1.6	0	0	0	1.7	5.4	3.2	0	2.2	0	2.0	5.4
6 ～ 7 時 間	18.0	11.1	16.9	31.5	23.7	12.5	27.6	18.4	24.7	36.6	40.0	37.8
7 ～ 8 時 間	42.6	42.6	50.7	38.5	44.1	44.6	53.0	50.0	44.1	36.6	36.0	46.0
8 ～ 9 時 間	32.8	29.6	25.4	28.0	18.7	25.0	13.8	27.6	23.7	16.7	14.0	8.1
9 ～ 10 時 間	4.9	9.3	7.0	1.8	5.1	8.9	2.1	1.3	3.2	6.7	2.0	2.7
10 時 間 以 上	0	5.7	0	0	1.7	0	0	0	2.2	0	4.0	0
無 記	0	1.9	0	0	5.1	3.6	0	2.6	0	3.3	2.0	0

表 7 自 由 時 間

	農 業 男 子			非 農 業 男 子			農 業 女 子			非 農 業 女 子		
	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田
(N)	61	54	71	57	59	56	94	76	93	30	50	37
1 時 間 以 下	8.2	5.7	9.9	21.0	8.5	8.9	11.7	23.7	17.2	13.3	10.0	21.6
1 ～ 2 時 間	42.6	27.8	38.0	21.0	23.7	46.4	42.4	39.5	44.1	26.6	26.0	37.8
2 ～ 3 時 間	29.5	35.2	32.4	26.3	22.0	30.4	20.1	30.3	29.0	23.3	22.0	21.6
3 ～ 4 時 間	9.8	11.1	4.2	12.3	13.6	5.4	7.4	4.0	5.4	10.0	14.0	13.5
4 ～ 5 時 間	6.6	5.7	9.9	1.8	5.1	1.8	3.2	2.6	3.2	13.3	10.0	2.7
5 ～ 6 時 間	0	9.3	4.2	0	10.2	1.8	0	0	0	0	2.0	0
6 時 間 以 上	1.6	1.9	0	3.5	6.8	1.8	1.1	0	0	0	2.0	2.7
無 記	1.6	3.7	1.4	14.0	10.2	3.6	5.3	0	1.1	13.3	14.0	0

生活における時間的要素を労働，睡眠，自由（余暇）の三つに大別した。

大野地区の場合，農業男子の労働時間は「8～10時間」に集中しており，12時間以上の就労は8.2%にみられる。女子においては，6時間から12時間以上にいたる各段階に略々均等な割合の配列がみられるが，12時間以上の就労が24.4%もあり，家事および農業労働の二重負担の実態が如実にあらわれている。

睡眠時間は男子の場合，大体8時間帯に集中しているが，全般に女子は約1時間下廻る傾向にあって，農繁期は男女とも更に1時間の低下がみられる。

自由時間は男女とも総じて1～2時間型にピークがみられるが，全般に女子の多忙さが目立っている。

平日の余暇の過ごし方は，「テレビ・ラジオ」（65.6%），「新聞・雑誌」（59%）などのマス・

メディアとの接触を筆頭に休息型が主流となしており、この傾向は女子における余暇利用の典型をなしている。一方、「余暇の増減」については男子に「減少した」とするものが多く、女子に「増加した」と判断するものが多い。

休日のマス・メディアとの接触の程度は明かに低下を示しているが、依然として休息型が主体をなしている。その他、比較的に顕著なものは女子における「婦人会などの団体の集会、活動、講習会」、「家族や子どもとのだんらん」、「買物・訪問」のための外出などである。

余暇利用に対するニーズは、男子57.4%、女子72.1%であるが、その内訳は男子の「休息・休養」および「小旅行」、女子の「家族や子どもとのだんらん」(63.2%)、「婦人・成人学級活動への参加」(29.4%)が高率である。

生馬地区の場合、労働時間については大野地区に等しい傾向を示しているが、12時間以上の就労者は少なく、3.7%にすぎない。しかし一方、農業女子において、12時間以上とするものが29.0%にみられ、女子の長時間労働の傾向がうかがえる。

自由時間は男子の2～3時間型、女子の1～2時間型が典型とみなされる。

余暇の過ごし方については、大野地区とほぼ類似の傾向をもっているが、著明な差異のみられるのは、平日における女子の「家族や子どもとのだんらん」(43.4%)である。しかし休日のこれは低く、両地区間に差はみられない。

「余暇の増減」についても大野地区と同様に、男子に「減少」を、女子に「増加」を報告するものが多い。

余暇利用のニーズも、その割合において男女とも大野地区と殆んどおなじであり、その内容は男子の「小旅行」(54.8%)、女子の「家族や子どもとのだんらん」(55.0%)に代表されるが、反面、「休息・休養」に対する要求は20%の水準で必ずしも高くはない。

それのみか、生馬地区の農業男子において「スポーツ活動」および「趣味活動」がともに29%の水準で高率を示し、読書等を含めて積極的な活動への指向がみられる。

佐田町西須佐校区の場合、生活時間は他の二地区と一致した構造をもつが、とくに農業男子に長時間就労の傾向がうかがえる。余暇の過ごし方は、殆んどマス・メディア及び休息・休養に集中され、余暇の増減についても男女とも他地区に等しい。

休日にはテレビ・休養中心のパターンを示し、女子において団体の集会や講習会への参加が僅かに認められるが、主として「子どもの世話」や「家族や子どもとのだんらん」である。余暇活動のニーズも前二地区の場合と全く同じ傾向を示している。

2. 保健的意識及び態度 (表8-14)

住民の保健に関する意識・態度の水準を理解することは、今後、学童の体位向上運動を実質的に推進させるために必要な基本条件である。

そこで、これらの指標を得るために、地域保健行政レベルにおける福祉事業との対応を中心に調査項目を設定した。以下その結果について概括的に述べる。大野地区の場合一まづ、自分

表 8 ツベルクリン反応認識

	農業男子			非農業男子			農業女子			非農業女子		
	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田
(N)	61	54	71	57	59	56	94	76	93	30	50	37
陰性	23.0	25.9	8.5	33.3	32.2	16.1	33.9	35.5	19.4	30.0	36.0	10.8
疑陽性	4.9	3.7	16.9	8.8	8.5	7.1	6.4	5.3	9.7	10.0	8.0	5.4
陽性	32.8	42.6	62.0	35.0	47.5	67.9	36.0	46.1	62.4	33.3	42.0	73.0
わすれた	24.6	22.2	8.5	21.0	10.2	3.6	19.1	9.2	6.5	20.0	14.0	0
無記	14.8	5.7	4.2	1.8	1.7	5.4	4.2	4.0	2.2	6.7	0	10.8

表 9 寄生虫予防の配慮

	農業男子			非農業男子			農業女子			非農業女子		
	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田
(N)	61	54	71	57	59	56	94	76	93	30	50	37
常に行う	36.1	31.5	45.1	43.8	39.0	48.2	68.9	64.5	69.9	70.5	70.0	70.3
ときたま注意	50.8	50.0	42.3	43.8	44.1	46.4	27.6	29.0	24.7	27.5	24.0	21.6
その意味ではない	6.6	14.8	9.9	7.0	15.3	1.8	2.1	2.6	1.1	1.6	4.0	2.7
無記	6.6	3.7	2.8	5.3	1.7	3.6	1.1	4.0	4.3	0.8	2.0	5.4

表 10 X線検診(考え)

	農業男子			非農業男子			農業女子			非農業女子		
	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田
(N)	61	54	71	57	59	56	94	76	93	30	50	37
その都度受診	64.0	63.0	67.6	63.0	83.1	92.8	72.1	71.1	78.5	79.9	80.0	81.1
毎回でなくともよい	26.2	27.8	22.5	26.3	13.6	3.6	14.8	19.8	10.8	6.7	14.0	8.1
無記	9.8	9.3	9.9	10.5	3.4	3.6	12.7	9.2	10.8	13.3	6.0	10.8

表 11 X線検診受診(実践)

	農業男子			非農業男子			農業女子			非農業女子		
	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田
(N)	61	54	71	57	59	56	94	76	93	30	50	37
いつも進んで受ける	64.0	61.1	81.7	73.5	74.6	85.7	94.3	82.9	87.1	76.6	72.0	86.5
まわりから奨められて	18.0	22.2	9.9	8.8	11.9	8.9	3.2	11.9	5.1	6.7	20.0	8.1
殆んど受けぬ	9.8	13.0	4.2	10.5	10.2	3.6	3.2	1.3	3.2	10.0	6.0	0
無記	8.2	3.7	4.2	7.0	3.4	1.8	1.1	4.0	4.3	6.7	2.0	5.4

表 12 成人病検診(考え)

	農業男子			非農業男子			農業女子			非農業女子		
	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田
(N)	61	54	71	57	59	56	94	76	93	30	50	37
定期的にやるのがよい	72.2	74.1	73.2	80.5	84.8	92.8	82.7	85.5	80.7	66.6	82.0	83.8
そうまでしなくてもよい	19.7	16.7	14.1	14.0	10.2	5.4	10.6	9.2	6.5	16.7	6.0	8.1
無記	8.2	9.3	12.7	5.3	5.1	1.8	6.4	5.3	12.9	16.7	12.0	8.1

表 13 伝染病予防接種(考え)

	農業男子			非農業男子			農業女子			非農業女子		
	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田
(N)	61	54	71	57	59	56	94	76	93	30	50	37
必ず受けるべきだ	70.5	61.1	84.5	85.8	84.8	91.1	74.2	68.4	87.1	79.9	86.0	86.5
毎回でなくてもよい	16.4	31.5	7.0	8.8	6.8	3.6	17.0	26.3	4.1	13.3	8.0	2.7
めったにかからぬので受けなくてよい	3.3	0	0	1.8	3.4	0	2.1	2.6	2.2	0	2.0	0
無記	9.8	7.4	8.5	3.5	5.1	5.4	6.4	2.6	6.5	6.7	4.0	10.8

表 14 伝染病予防接種の実施

	農業男子			非農業男子			農業女子			非農業女子		
	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田
(N)	61	54	71	57	59	56	94	76	93	30	50	37
いつも進んで受ける	45.9	40.7	77.5	63.0	57.6	75.0	57.2	42.1	83.9	53.3	44.0	78.4
時々受ける	37.7	44.5	14.1	24.5	27.1	17.9	37.1	39.5	14.0	33.3	48.0	10.8
ほとんど受けぬ	11.5	7.4	1.4	10.5	11.9	5.4	4.2	13.2	1.1	13.3	4.0	5.4
無記	4.9	7.4	7.0	1.8	3.4	1.8	1.1	5.3	1.1	0	4.0	5.4

自身の「ツベルクリン反応の結果」に関しては、その回答の当否は別として、「忘れた」もの及び「無記」者の数が農業男子に高く、39.4%であるのに対して、女子では25%程度で農業者と非農業者との差はみられない。

「寄生虫予防の配慮」は女子の炊事、調理の仕事の役割を反映して70.5%の水準を示し、男子の40%に比して高率であることが分かる。

エックス線検診については、「その都度必ず受診すべきだ」とするものが女子74.5%であるのに対し、男子64.0%と約10%の差がみられ、受診実績についても農業男子の消極性が顕著である。

「成人病」ならびに「伝染病予防」についても、略々同様の傾向が認められたが、とくに非

農女子において「そうまでしなくてもよい」及び「無記」があわせて33.4%にみられる点が注目される。

生馬地区の場合—「ツベルクリン反応の結果」については、「わすれた・わからない」および「無記」が農業男子に27.9%の割合で認められたが、女子は13.0—14.0%で農業・非農業の差はみられない。「寄生虫予防」は、「常に留意する」とする女子の66.7%に比して、男子は35.4%の低率を示し、とくに農業男子(31.5%)が劣っている。「エックス線検診」については、大凡、大野地区と同様の傾向が認められる。

佐田町西須佐地区の場合、これらの項目に関する意識水準はかなり高いとみることが出来、各種保健事業(検診・接種)の実施率が最も高く示されている。

3. 地区の健康化

大野地区の場合、マスコミによる保健の知識・情報接受状況については、「関心をもってみる」ものが少々低く、非農女子の56.6%が逆に高くなってきている。

保健知識の情報源は、「テレビ・ラジオ」、「新聞・雑誌」、「役所・公民館・保健所」などであるが、とりわけ女子における婦人会の役割がたかい。しかし、非農女子の関心の高さと情報

表 15 保健情報 (関心度)

	農業男子			非農業男子			農業女子			非農業女子		
	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田
(N)	61	54	71	57	59	56	94	76	93	30	50	37
関心をもって見る	39.4	42.6	40.9	38.5	50.9	48.2	31.8	35.5	40.9	56.6	56.0	48.7
少しは見る	45.9	50.0	46.5	43.8	39.0	46.4	58.3	56.6	52.7	30.0	40.0	40.5
殆んど見ない	11.5	1.9	7.0	14.0	8.5	1.8	7.4	5.3	3.2	6.7	2.0	5.4
無記	3.3	5.7	5.6	3.5	1.7	3.6	2.1	2.6	3.2	3.3	2.0	5.4

表 16 地区の健康化のための重点施策(意見)

	農業男子			非農業男子			農業女子			非農業女子		
	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田
(N)	61	54	71	57	59	56	94	76	93	30	50	37
1 蚊、ハエ、ねずみ駆除	39.4	46.4	17.6	36.8	50.8	17.9	28.6	51.4	19.4	66.7	48.0	21.6
2 栄養・育児指導	27.9	20.0	7.7	29.8	22.0	11.6	41.3	23.6	10.8	26.6	36.0	14.9
3 成人病対策	24.6	26.0	19.0	38.5	30.6	18.8	29.7	43.4	18.3	30.0	22.0	12.2
4 寄生虫対策	29.5	22.2	17.6	22.8	11.8	14.3	30.7	18.4	21.0	10.0	14.0	13.5
5 からだづくり	29.5	24.0	7.0	17.5	23.8	9.8	25.4	21.0	5.7	20.0	20.0	10.8
以下略												
0 無記	13.1	20.4	0.7	17.5	10.2	5.4	15.9	6.6	3.2	13.3	8.0	2.7

表 17 地区の健康化のための活動団体（期待）

	農 業 男 子			非 農 業 男 子			農 業 女 子			非 農 業 女 子		
	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田
(N)	61	54	71	57	59	56	94	76	93	30	50	37
1 部 落 会	72.2	74.0	43.0	68.3	79.6	41.1	72.8	76.4	39.3	63.3	68.0	39.2
2 婦 人 会	59.0	70.4	32.4	57.8	56.0	30.4	74.2	78.9	38.2	59.9	62.0	32.4
3 P T A	23.0	5.6	2.1	17.5	22.0	8.0	20.1	4.0	4.3	33.3	28.0	6.8
4 青 年 団	14.8	5.6	2.8	15.8	1.8	0.9	7.4	6.6	0.5	6.7	6.0	6.8
5 農 協 婦 人 部	9.8	11.2	6.3	10.5	5.0	3.6	8.5	21.0	10.8	6.7	12.0	2.7
6 農 協 青 年 部	4.9	5.6	4.2	3.5	5.0	0.9	1.1	4.0	0.5	0	0	1.4
以 下 略												
0 無 記	16.4	11.4	4.9	22.8	0	12.5	15.9	10.6	4.8	30.0	18.0	8.1

接受の間に矛盾がみられ、これらの傾向は、同時に保健意識・態度及び行動の面にも表われている。

生馬地区も大体一致した傾向を有するが、特に農業女子における「婦人会」(39.4%)の位置が目される。

地区の健康化のための重点施策として指摘される事柄は、「蚊・ハエの駆除」および「寄生虫予防」の環境衛生条件に関することであり、「成人病」、「からだづくり」があげられるが、農業女子では「栄養・育児指導」(41.3%)が顕著である。

生馬地区においても類似の傾向がみられるが、女子の「栄養・育児指導」に対するニーズは高くない。

佐田町西須佐校区においても、「成人病」および環境衛生項目が中心で、「栄養・育児指導」ならびに「からだづくり」(12~14%)についての回答は低くでている。

そこで、これらの地区健康化のための活動を推進するためには、どの組織や団体が中心となるのが望ましいかについては、三地区とも部落会を筆頭に婦人会に対する期待が大きく示されている。一面、婦人における婦人会への支持率は非農者群にいく分低くなる傾向がある。

4. 学童の身体発達に対する保護者の認識

この項目については、日本全般、地区の実情および自分の子どもの三つの観察対象を設定して、その認識をたづねた。

まづ、近年における日本の子どもの発育加速の現象については、「よく知っていた」とするものが生馬地区に高く、西須佐、大野の順をなしている。また、男女ともに農業者群は非農業者群に比してこの面の理解度が低い結果になっている。

「地区の子ども」については、「すこし劣る」、「大いに劣る」と劣位傾向を指摘するものが多く、略々適確な判断をしているとみられるが、西須佐地区の場合「よいとおもう」ものが高

表 18 昭和44年度平均身長の松江市平均との比較 (単位センチメートル)

		1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年
大野小	男	- 0.8	- 3.8	- 2.1	- 1.5	- 3.4	- 6.7
	女	- 1.7	- 1.8	- 1.5	- 1.6	- 1.1	- 4.0
生馬小	男	- 1.7	- 1.9	- 0.9	+ 1.2	- 2.9	- 2.6
	女	- 1.1	+ 0.5	- 0.5	- 1.4	- 4.0	+ 1.3
西須佐小 (佐田町)	男	- 1.3	- 1.8	- 1.7	- 2.5	- 1.1	- 3.3
	女	0	- 2.4	- 1.5	- 0.9	- 0.2	- 2.8

表 19 昭和44年度平均体重の松江市平均との比較 (単位kg)

		1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年
大野小	男	+ 0.1	- 1.2	- 0.8	- 0.2	- 2.4	- 3.5
	女	- 0.2	- 0.6	- 1.1	+ 0.1	0	- 2.9
生馬小	男	- 0.2	- 0.8	- 0.8	+ 1.8	- 3.0	- 1.9
	女	- 0.6	+ 0.4	+ 0.1	+ 0.3	- 2.1	+ 3.2
西須佐小	男	- 1.3	- 0.9	- 0.9	- 0.5	- 0.5	- 0.9
	女	- 0.8	- 1.3	- 0.1	- 0.3	+ 0.4	- 2.6

表 20 昭和44年度平均胸囲の松江市平均との比較 (単位センチメートル)

		1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年
大野小	男	+ 1.3	+ 1.1	+ 0.9	+ 1.5	- 0.3	- 1.2
	女	+ 0.5	+ 3.4	+ 1.0	+ 2.3	+ 1.0	- 0.7
生馬小	男	- 0.6	- 0.3	- 0.5	+ 0.7	- 2.7	- 1.4
	女	- 2.1	+ 1.4	- 1.0	- 1.3	- 1.7	+ 4.0
西須佐小	男	- 1.1	- 0.7	- 0.7	+ 0.1	- 1.0	- 0.9
	女	- 2.3	- 0.9	- 1.5	+ 0.5	+ 0.4	- 1.4

表 21 日本の子どもの発育向上についての認識

	農業男子			非農業男子			農業女子			非農業女子		
	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田
(N)	61	54	71	57	59	56	94	76	93	30	50	37
1 よく知っていた	44.3	63.0	67.6	63.0	72.9	66.1	45.6	63.2	66.7	63.3	78.0	73.0
2 少しは知っていた	34.4	29.6	22.5	26.3	25.4	30.4	36.0	31.6	23.7	20.0	12.0	21.6
3 知らなかった	6.6	1.9	1.4	5.3	1.7	0	4.2	0	1.1	0	4.0	0
0 無記	14.8	5.7	8.5	5.3	0	3.6	13.8	5.3	8.6	16.7	9.0	5.4

表 22 地区の子どもの発育状態 (認識・判断)

	農 業 男 子			非 農 業 男 子			農 業 女 子			非 農 業 女 子		
	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田
(N)	61	54	71	57	59	56	94	76	93	30	50	37
1 よいと思う	4.9	7.4	15.5	5.3	8.5	21.4	4.2	1.3	24.7	3.3	2.0	16.2
2 普 通	31.2	53.7	62.0	17.5	55.9	51.8	13.8	40.8	55.9	20.0	42.0	54.1
3 少し劣る	37.7	27.8	18.3	38.5	22.0	25.0	31.8	47.4	18.3	43.3	38.0	24.3
4 大いに劣る	21.3	7.4	0	35.0	10.0	0	42.4	10.5	0	26.6	16.0	0
0 無 記	4.9	3.7	4.2	3.5	3.4	1.8	7.4	0	1.1	6.6	2.0	5.4

表 23 自分の子どもの発育状態 (認識・判断)

	農 業 男 子			非 農 業 男 子			農 業 女 子			非 農 業 女 子		
	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田
(N)	61	54	71	57	59	56	94	76	93	30	50	37
1 よ い	8.2	14.8	9.9	5.3	25.4	17.9	9.5	15.8	20.4	10.0	20.0	21.6
2 普 通	64.0	51.9	64.8	63.0	64.4	66.1	55.1	63.2	54.8	79.9	64.0	62.2
3 あまりよくない	24.6	29.6	22.5	26.3	10.2	12.5	31.8	21.1	22.6	10.0	16.0	13.5
0 無 記	3.3	3.7	2.8	5.3	0	3.6	3.2	0	2.2	0	0	2.7

表 24 子どもの発育のために何が一番大切と考えるか

	農 業 男 子			非 農 業 男 子			農 業 女 子			非 農 業 女 子		
	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田
(N)	61	54	71	57	59	56	94	76	93	30	50	37
1 栄 養	26.2	22.2	39.2	36.8	25.4	33.8	46.6	40.6	43.9	46.6	22.0	45.9
2 運 動	3.3	18.5	11.2	28.0	25.4	21.4	2.1	11.8	9.6	33.3	12.0	16.2
3 健 康	11.5	7.4	4.2	3.5	13.5	8.9	9.5	13.1	8.6	6.7	12.0	10.8
4 偏食をなくす	6.6	9.3	7.0	1.8	13.5	0	10.6	11.8	11.8	13.3	20.0	2.7
5 環 境	8.2	3.7	9.8	1.8	6.8	3.6	1.1	10.5	3.2	3.3	12.0	2.7
6 生活規制	4.9	3.7	4.2	5.3	1.7	0	2.1	0	5.4	0	4.0	5.4
以 下 略												
0 無 記	34.4	24.1	21.0	21.1	18.6	32.0	25.5	23.6	24.6	16.7	26.0	18.9

表 25 子どもの発育・健康への配慮

	農業男子			非農業男子			農業女子			非農業女子		
	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田
(N)	61	54	71	57	59	56	94	76	93	30	50	37
いつも気を配るとききたま	42.6	42.6	43.7	52.5	50.9	48.2	58.3	57.9	49.5	63.3	64.0	67.6
あまり留意しない	45.9	29.6	31.0	35.0	37.3	46.4	30.7	26.3	41.9	23.3	30.0	27.0
無記	3.3	18.5	15.5	1.8	10.2	1.8	2.1	5.3	4.3	10.0	4.0	0
	8.2	9.3	9.9	10.5	1.7	3.6	8.5	10.5	4.3	3.3	2.0	5.4

表 26 躰や教育

	農業男子			非農業男子			農業女子			非農業女子		
	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田
(N)	61	54	71	57	59	56	94	76	93	30	50	37
十分心がけている	42.6	46.3	29.6	52.5	45.8	50.0	55.1	55.3	44.1	56.6	56.0	48.7
学校に任せている	45.9	48.2	63.4	36.8	49.2	44.6	38.2	40.8	50.5	36.6	38.0	46.0
無記	11.5	5.6	7.0	10.5	5.1	5.4	6.4	4.0	5.4	6.6	6.0	5.4

表 27 子どもの世話

	農業男子			非農業男子			農業女子			非農業女子		
	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田
(N)	61	54	71	57	59	56	94	76	93	30	50	37
よくみてやれる	9.8	13.0	15.5	14.0	10.2	19.6	11.7	18.4	21.5	40.0	36.0	32.4
十分みてやれぬ	70.5	66.7	63.4	56.0	50.9	55.4	66.8	76.3	74.2	50.0	52.0	62.2
ほとんどみてやれぬ	13.1	16.7	15.5	22.8	32.2	16.1	5.3	1.3	2.2	0	8.0	2.7
無記	6.6	3.7	5.6	7.0	6.8	8.9	5.3	4.0	2.2	10.0	4.0	2.7

表 28 子どもの健康診断の結果

	農業男子			非農業男子			農業女子			非農業女子		
	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田
(N)	61	54	71	57	59	56	94	76	93	30	50	37
知っている	41.0	50.0	53.5	43.8	55.9	57.1	65.7	76.3	75.3	73.3	72.0	81.1
年度により知るところもある	29.5	33.4	32.4	35.0	27.1	25.0	24.4	15.8	17.2	16.7	20.0	13.5
大抵よく知らない	21.3	11.1	8.5	10.5	15.3	7.1	2.1	4.0	3.2	3.3	6.0	2.7
無記	8.2	5.6	5.6	10.5	1.7	10.7	7.4	4.0	4.3	6.6	2.0	2.7

表 29 自 分 の 健 康 状 態

	農 業 男 子			非 農 業 男 子			農 業 女 子			非 農 業 女 子		
	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田
(N)	61	54	71	57	59	56	94	76	93	30	50	37
大 変 良 好	18.0	14.8	11.3	14.0	13.6	16.1	11.7	14.2	15.1	10.0	12.0	13.5
普 通	62.3	64.8	71.8	68.3	76.3	62.5	72.1	70.8	72.0	66.7	74.0	67.6
あまりよくない	14.8	18.5	15.5	12.3	8.5	19.6	11.7	13.3	10.8	23.3	12.0	18.9
無 記	4.9	1.9	1.4	5.3	1.7	1.8	4.2	1.8	2.2	3.2	2.0	0

表 30 疲 労 状 態

	農 業 男 子			非 農 業 男 子			農 業 女 子			非 農 業 女 子		
	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田
(N)	61	54	71	57	59	56	94	76	93	30	50	37
ほとんど疲れない	9.8	14.8	2.8	7.0	5.1	5.4	3.2	4.0	3.2	6.6	10.0	5.4
翌朝はとれている	60.7	70.4	52.1	66.7	71.2	67.9	72.1	81.6	72.0	73.3	68.0	70.3
翌朝までもちこす	19.7	7.4	39.4	19.3	20.3	25.0	19.1	11.8	20.4	13.3	20.0	24.3
無 記	9.8	7.4	5.6	7.0	3.4	1.8	5.3	2.6	4.3	6.6	2.0	0

表 31 生 活 の か ん じ (適 応)

	農 業 男 子			非 農 業 男 子			農 業 女 子			非 農 業 女 子		
	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田	大野	生馬	佐田
(N)	61	54	71	57	59	56	94	76	93	30	50	37
楽 し い	6.6	59.3	56.0	10.5	52.6	44.6	13.8	40.8	46.2	23.3	50.0	43.2
普 通	78.7	35.2	38.0	73.5	40.7	46.4	73.1	52.6	50.5	69.9	42.0	54.1
あまり面白くない	9.8	1.9	4.2	10.5	5.1	5.4	9.5	2.6	2.2	6.6	6.0	2.7
無 記	4.9	3.7	1.4	5.3	1.7	3.6	3.2	4.0	1.1	0	2.0	0

率で、「大いに劣る」という指摘は見当たらない。

次に「自分の子ども」の場合、「まづ普通」とするものが高率で、「わが子」に関しては評価規準を低める傾向が共通的に観察される。しかしながら、西須佐校区の場合、「自分の子ども」については地区の子ども全般に対する評価に比して規準を厳しく判断していることがみられる。

この点、大野並びに生馬地区と対蹠的であるとみてよい。次に、「子どもの発育のために重要であるとおもわれる事項」(自由記述)については、「栄養」を指摘するものが最も高率であるが、大野地区における男子非農業者群の「運動」(身体的運動) 28.0% に対して、男子農業者群の3.3%は極めて対蹠的に現われている。同様に、女子についても非農業者群 33.3% に対し

て農業者群が2.1%であるにすぎない。この点、生馬地区では「運動」と答えた男子農業者群は27.8%、非農業者群と殆んど差がみられず、女子のそれは13%の水準を保っている。

西須佐校区においては、矢張り「栄養」が筆頭にあげられるが、他の要素の指摘は全般に低調である。しかし全般に三地区とも共通にいることは農業男子のこの面への関心・理解が低いことである。

子どもの管理的側面についてみると、まづ「子どもの発育・健康への配慮」は三地区とも全く齊一な状態を示しているが、「あまり留意しない」とするものが大野地区の非農女子に10%、生馬地区の農業男子18.5%に認められる。

「子どもの安全」に対しては、全般に農業者群よりも非農業者群にいく分の関心の深さがあるられており、女子では非農業者群が低いのが共通している。傾向として、いく分、生馬地区の関心度が高くみられる。

次に「躰や教育」面における家庭の主体性と学校への依存度を観ると、生馬地区の男子群全般に学校への依存傾向が高くなってきている。

しかし、西須佐地区の農業男子において、これが一層強くあらわれている。

「子どもの世話や面倒」については女子非農業者群に有利である。「子どもの健康診断の結果」については、総じて女子の理解、認識が高かく、農業男子の低位性が共通的である。

自身の健康度に関しては、「あまり健康でない」と判断するものが生馬地区の農業男子の18.5%にみられ、大野地区の非農女子の23.3%とともに高率である。しかし、西須佐地区においては男女ともに非農業者群約20%にこの傾向がみられる。

疲労では、その蓄積を訴えるものが生馬地区において男女とも非農業者群20%にみられ、大野地区では男女とも農業者群に約19%の水準であらわれている。これに対して西須佐地区では農業男子の約40%が「疲労が翌日までもちこす」ことを訴えており、農業女子の20.4%、男女非農業者群の25%は他地区に比べて極めて高い結果を示している。

睡眠の充足度は大野地区の場合、大半が適当であるのに対して、生馬地区の農業男女ならびに西須佐校区の農業男女に「不足」を報告するものが非農業者群に比して多く認められる。

V 要 約

- (1) 生活時間構造の実態から、農業女子群の家事及び農業労働の二重負担が顕著であることが理解される。
- (2) 余暇利用はマスメディアによる受動的慰楽及び休養を中心とする農村共通のパターンを有しているが、都市部への近接度の高い地区においては男女とも能動的、積極的活動への萌芽がみられる。
- (3) 保健的意識及び態度は概して農業男子群に低さが目立ち、行動に消極的傾向がみられる。これに対して女子の場合、全般に農業、非農業による差はみられない。

- (4) しかし、地区によって女子非農業者群において、保健に対する関心の高さととは逆に、意識・行動に矛盾傾向の認められるところもあった。
- (5) 地区健康化の意識内容に、地区のレベルにおけるこれまでの保健活動実績（例えば、蚊・ハエの撲滅や寄生虫の駆除など）がかなり強く影響を与えていることが認められた。
- (6) 学童の低位体に対する施策の何等かの程度の推進が、そのまま住民の課題意識における地区間差を生みだしていることが認められた。
- (7) 学童のからだに対する保護者の認識は、その評価規準においてかなりの差がみとめられ、概して「わが子」に対する評価が寛大に流れやすい傾向のあること及び評価内容が対象（全国、地区、自分の子ども）の相違によって矛盾を生じ易いことが知られた。
- (8) 一般保健問題と同様、子どもの発育・健康に関する理解においても、総じて男子農業者群に低くあらわれている。
- (9) 疲労及び健康状態の判断における地区間差は、住民の年令・労働条件、栄養、生活環境条件などの生活条件のちがいを反映しているとおもわれる。
- (10) 学童の低位体施策のための活動は、部落会および婦人会が具体的な推進の役割を担うのが望ましいことが指摘された。

これらの諸結果は、体位向上施策としての地区組織活動の組織化過程およびその活動計画、内容、方針の設定について、いくつかの示唆的事実を含むとおもわれる。

すなわち、まづこのような体位向上のため活動主体がどこにおかれるべきかがとりあげられる。住民の大部分によって、このことは部落のレベルにおいて受容され、婦人会を除く他の機能的社会集団への期待は極めて低調であった。つまり、現状では農村部においては、地域共同体の生活基盤に根づいた課題の運用でない限り継続発展させることが困難であることが分かる。また一方、農村部における住民の地域団体依存の傾向は、住民の個別の解決すべき課題認識や実践にもとづく現状改革の行動転化の源泉には必ずしもなりえない。したがって、村落的性格の濃厚な地域では、いわゆる地域ぐるみの活動の適用が、厳密にはさまざまな限界をもちながらも、なお地区組織活動における基本的利点を内包しているとみることができる。しかし、このような論議や考察は、或は保守的、消極的行動基盤を助長させるような印象を与えるかもしれない。

従来、こうした地区組織活動の運用において、住民による課題認識、活動への参加の度合を高めるために、しばしば指摘したことは、1) 指導者の資質、2) 権限の移譲・分化、3) 役割の明確化などであった。

これらは個々の地区における組織化の過程で更に検討されるべき課題である。

また、調査結果は、衛生教育の可能性と地区組織活動の実効性を示唆しているようにおもわれる。

VI 生馬地区における栄養調査の事例

1. 協議会メンバーによって、更に実践に直結する課題として栄養調査が提起され、家庭における献立内容が、7日間に亘って刻明に記録して報告されるよう依頼された。その分析結果を要約すると次の如くである。

- (1) カルシウム及び蛋白源となる食品の不足、とくに牛乳の消費が少い。
- (2) 穀類は十分であるが、ビタミンB₁の給源に一考を要する。
- (3) 油脂は43%の充足率で必要量の半分にも満たない。
- (4) 緑黄野菜の摂取が少く、約四分の1充足率である。
- (5) 生野菜（ビタミンCの給源）をもっと多く補給すべきである。
- (6) 全般的に非農家世帯の食生活の方がバランスがとれており、農家は偏食傾向がある。とくに農繁期の共同献立の検討が大切である。
- (7) 食品摂取結果を五段階評価の規準によると、例えば55%水準で2点段階が最も多く、3点段階が夕食の47%で最も好成績を示し、昼食が予想外に悪く、1点評価のものが17%含まれていた。
- (8) 以上の結果から、栄養のバランスは昼食が最も不良で、朝食がこれに次いでいる。夕食は最も優れているが、それでも総合的に充足率は60%にすぎない。

2. この調査から明かになった重要な事柄のひとつは、さきに栄養摂取状況に関する食品調査で定性的に考察した結果の判断と対照させてみると、定量的結果とはかなり著しい評価の相違が発見されたことであった。例示すると、摂取頻度を問う場合、生馬地区で「肉類」を週三回以上とするものが57%、「魚類」90%となり、「卵」及び「牛乳」を毎日消費している家庭がそれぞれ40%、60%と報告された。これらの結果から、生馬地区の場合、とくに動物性蛋白の摂取は平均的農村に比べて高度であることが予想された。それにもかかわらず既述のような実態はこの面の一層の重点化の必要を確認させたのである。

あ と が き

昭和30年頃から顕在化し、とくに昭和34年以降急激になった重化学工業化と技術革新を主軸とする高度経済成長は、都市、農村を通じてかつてない急激な社会変動を起こし、人口、産業、就業、消費、生活様式、疾病、死因などの構造的変化の進行は保健上新しい問題を招来した。とくに昭和35年頃から加速しつつある社会変動の国民大衆の生活ないしは健康における特質は、単的にいえば地域特性 local characteristics の顕在化とその深化であるといわれるように、外部的条件の変革にともなう地域の人口構成、生活水準、栄養、発育、体力、疾病、死亡などの主体的条件の変化によって地域特性が顕在化して来ている。※

※ 地域保健活動—公衆衛生と行政学の立場から—100頁～118頁橋本正己著 医学書院1968

したがってこのをうな地域や地区の変動の基盤のうえに学童の体位の課題も位置づけていかなければならず、同時に住民生活・文化の課題として把握していく必要がある。都市化の漸進的進行と過疎化の対照的な地域の変貌過程に、学童の体位の課題は、すなわち子どもの生活自体は勿論、住民生活の諸条件と対応的にとりあげるべき意味をもつとおもわれる。